

令和5年2月16日

北九州市文化財保護審議会
会長 永尾 正剛 様

北九州市教育委員会

諮 問 書

下記文化財の文化財指定について諮問します。

記

有形文化財（考古資料） ありげ たらうぼうやま 有毛太郎坊山遺跡経塚出土品 一括

1 文化財の区分

有形文化財（考古資料）

2 名称及び員数

ありげ たろうぼうやま
有毛太郎坊山遺跡経塚出土品 一括

3 所有者氏名及び住所（保管場所）

北九州市教育委員会（北九州市立自然史・歴史博物館）

北九州市八幡東区東田二丁目4番1号

4 内容および法量

（1）経塚1出土遺物（集石1より出土）5点

- ア 青銅製経筒 底部径 13.3（推定）cm、胴部厚さ 0.06cm
(2片) 蓋直径 14.6cm、擬宝珠鈕直径 2.6cm、高さ 1.5cm
- イ 湖州六花鏡 現存長 10.14cm、厚さ 3mm、鈕 1cm×0.4cm の長方形
- ウ 棒状鍛造鉄器 現存長 6.0cm
- エ 青磁小形壺 口縁部径 2.6cm、胴部最大径 5.8cm、底径 2.8cm、高さ 4.0cm
- オ 台座石 全長 23.5cm、幅 20.0cm、厚さ 3.2cm

（2）経塚2出土遺物（集石3より出土）8点

- ア 青銅製経筒 筒身径 7.2cm、蓋径 12.0cm、高さ 23.7cm、器壁厚さ 0.3cm
台座底径 11.7cm、台座高 1.2cm
笠蓋直径 12.0cm、高さ 1.3cm、擬宝珠鈕直径 1.3cm、高さ 1.8cm
- イ 経筒外容器 蓋直径 26.7cm、胴部最大径 26.2cm、底径 25.0cm、高さ 27.4cm
(土師質蓋付円筒)
- ウ 紙本経片 計測不能
- エ 鉄小刀 全長 25.1cm、刃部長 22.0cm、刃部幅 3.1cm、厚さ 0.6cm
- オ 青銅製刀装具 現存長 2.9cm、幅 0.8cm、厚さ 0.3cm
- カ 鉄鏃 現存長 6.0cm、幅 3.2cm
- キ 青白磁合子 胴部最大径 6.2cm（推定）、底径 4.5cm（推定）、高さ 3.6cm
- ク ガラス小玉 34点 直径約 0.6cm、口径 0.2～0.3cm

5 由来・徴証等

(1) 出土地

北九州市若松区大字有毛 781 番地外

(2) 出土遺構

有毛太郎坊山遺跡は、標高約 50m の低位の有毛丘陵上に所在する弥生時代及び中世の遺跡群で、二度にわたって発掘調査が行われた。昭和 61 年(1986)の第 1 地点発掘調査では A 区、B 区、C 区の 3 地区に分かれ、A 区で 14～15 世紀代の 19 基の中世墓、B 区で平安末～鎌倉初期と推定される中世の集石墓 1 基、C 区で弥生～中世までの土壇墓や貯蔵穴、建物跡や配石遺構、集石墓などが発見されている。平成 6 年(1994)に行われた第 2 地点発掘調査では、C 区に連続すると考えられる調査区より、弥生時代の土壇墓 1 基、石蓋土壇墓 7 基のほか、2 基の経塚に伴う集石遺構が 3 基発見された。

ア 経塚 1

丘陵西側に形成された石積み遺構で、直径 1.8～1.6m、深さ 0.5m の円形土壇を掘削し、その中央部を 0.4×0.35m、深さ 0.4m に円形に掘り込んだ二重土壇である。一段目土壇内には人頭大の角礫が詰め込まれ、この集石の高さは東部で土壇上面より若干高く、小山状を呈していた。二段目土壇内面には厚さ 7cm の粘土壁が形成され、床面には平石が 2 個据えられ、その上面に 20×23cm、厚さ 3cm の楕円形の砂岩製の平石を台座石として置き、その上に青銅製経筒を据えたとみられる。

イ 経塚 2

丘陵北側に形成された石積み遺構で、直径 1.15m、深さ 0.4m の円形土壇を掘削し、その中央部を直径 0.5～0.6m、深さ 0.35～0.3m に円形に掘り込んだ二重土壇である。一段目土壇内には人頭大の石が詰め込まれ、この集石の高さは地表面から 0.4m 程度まで積まれている。二段目土壇内側には大型の石を貼り付け、底面に直径 52cm、厚さ 18cm の円石を台座石にして、その上部に土師質の経筒外容器が据えられていた。

(3) 指定資料の特徴

ア 経塚 1 出土遺物

青銅製経筒は腐食、破損しており、蓋と一部の胴部と底部が残るのみである。経筒は 2 枚の銅板を半筒形に丸めて鋸留めした大型のものである。経筒外面に渡金の痕跡が残ることから、本来は全体に鍍金されていたと考えられる。円形の底部は一部が残存する。蓋は被蓋形式で、銅板を叩き延ばして整形したもので、端部を折り曲げ 1cm ほどの扁平な縁を作り出し、端部下に身と重ね合わせるための 8mm の下がり部を作る。擬宝珠鈕には四葉座が伴う。

その他の出土遺物である鏡と合子は、いずれも上部土壇の北側集石下から出土した。青銅製鏡は全体の 3 分の 1 が残存する湖州六花鏡で、銘文は明確には読み

取れないが、一部に2×3cmの長方形の囲みがみえる。破損端部付近が3cmほどくぼんでいる。

合子は青磁の小型壺で、黄灰色の釉が底部外面以外にかかっている。蓋は出土していない。棒状鍛造鉄器は鉄鏃片と思われる。

イ 経塚2出土遺物

経筒外容器は土師質の円筒で、身の浅い皿状の蓋と対をなす。蓋上面には糸切りの痕跡がみえ、両者とも全体にしっかりした作りで、焼成は良好である。身の側面には焼成後にあけられた直径3cm程度の穿孔がみられる。

青銅製経筒の胴部は竹を模した形状で、7.3cm間隔で上・中・下の三段に突線紐帯が鑄出されており、上下段は突線紐帯が2条、中段は3条である。胴部外面には数箇所の不規則な傷がみられ、CTスキャンにより鑄掛による修復痕が確認できる。笠蓋は被蓋形式で、やや扁平な形状をしており、緩い甲盛をもつ。底板は秋草が鑄込まれた中央に鈕のある和鏡で、はめ底である。内部には塊状に団結した紙片が多数入っており、判読不能であるが紙本経の経巻と考えられる。

青白磁合子は身と蓋がセットになった景德鎮窯の印籠型で、状態は良好である。その他、鉄小刀、鉄鏃、青銅製刀装具などが出土した。

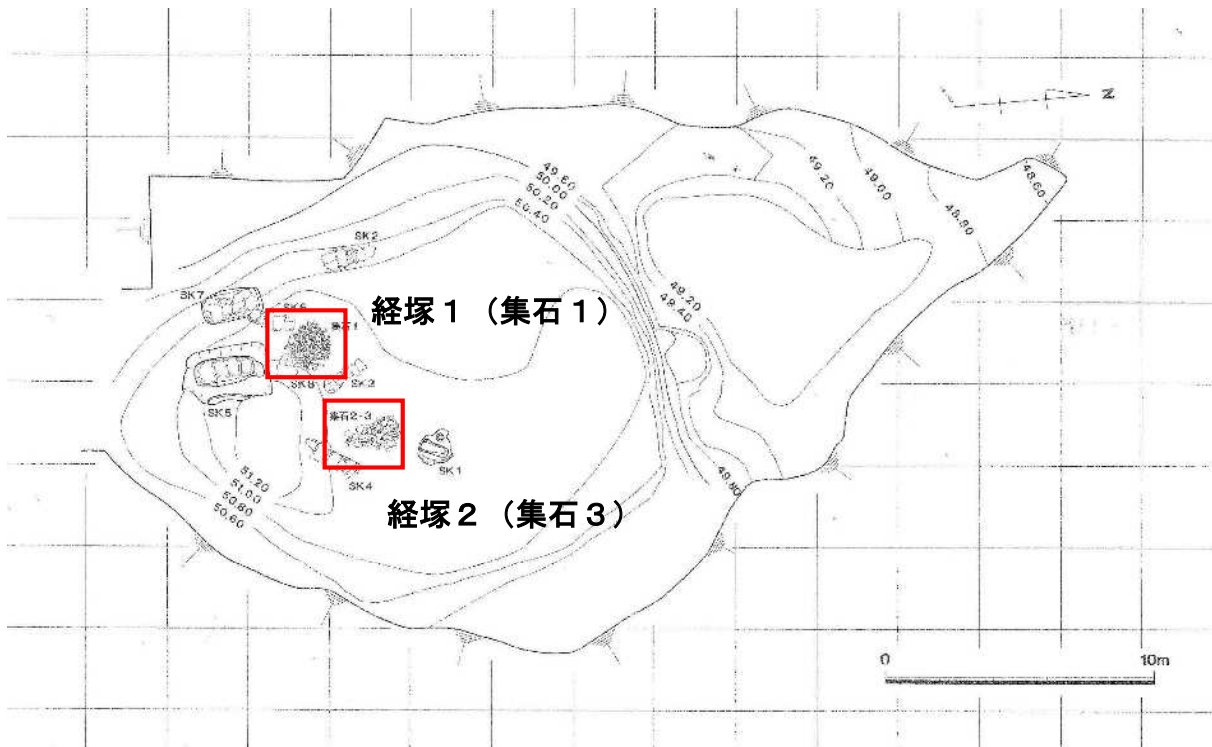
経筒とともに出土した青白磁合子の時期等から考えて、築造時期はおおむね12世紀前半とみられる。

6 指定理由

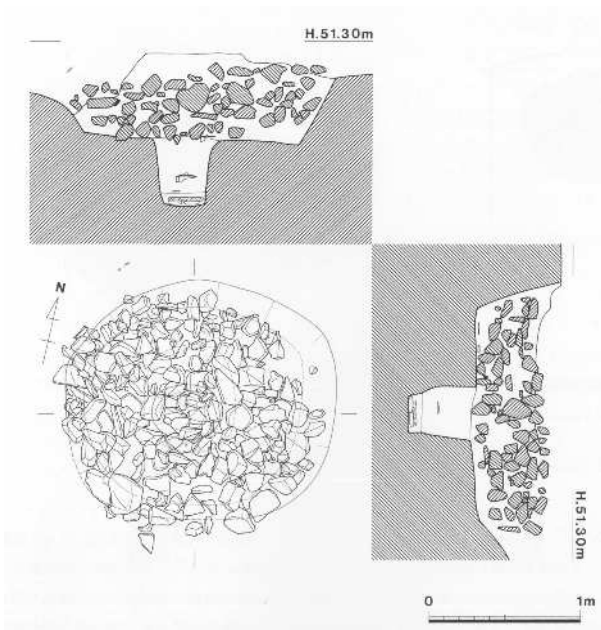
本経筒の造りは、経塚1出土の経筒が2枚の銅板を組み合わせた太身の造りで、全体に渡金を施す優品である。これは一般的に武蔵寺型とされる、組み合わせ式の銅版製経筒とは異なる品である。また、経塚2出土の経筒は鎮国寺型に分類され、北部九州地域でも特に遠賀川流域を中心に見られる経筒である。経塚2出土の経筒は、市内の金山谷・前ベラ山経塚出土例やハリヤ経塚出土例の紀年銘経筒（永久6年（1118）銘、共に小倉南区出土）ともきわめて類似しており、当地において経筒製作に携わった鑄物師集団の姿に迫ることもできる好資料群といえる。

北九州市内から発見された経筒は9点が知られるが、いずれも明治期の発見や、伝世品などが多く、埋納時の状態は不明である。よって現状では、考古学的な発掘調査を経て出土し、共伴遺物や遺構の形状、周辺の遺跡の状況が詳らかなものは本例のみであり、高い学術的価値を有する。また青白磁合子をはじめとする共伴資料についても、経筒と同時代性の高い資料として考古学上重要であるため、経塚出土品として指定し、共に保存をはかりたい。

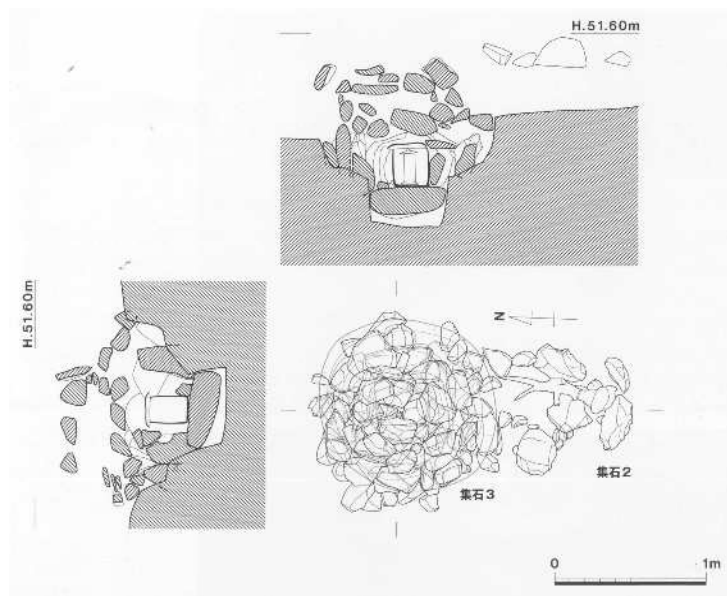
添付資料2 出土遺構



第1図 有毛太郎坊山遺跡 遺構配置図

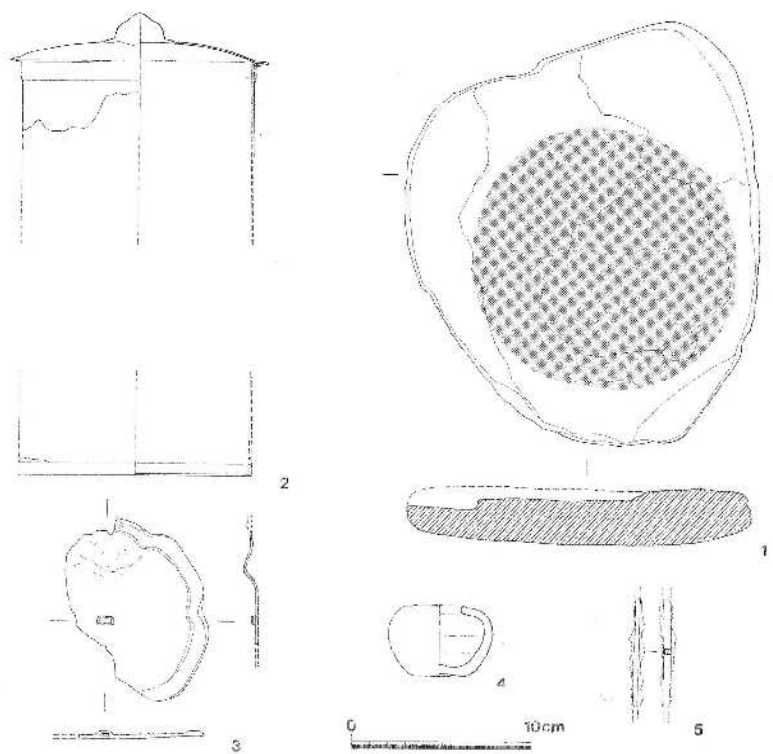


第2図 経塚1(集石1) 遺構実測図



第3図 経塚2(集石3) 遺構実測図

添付資料3 出土遺物

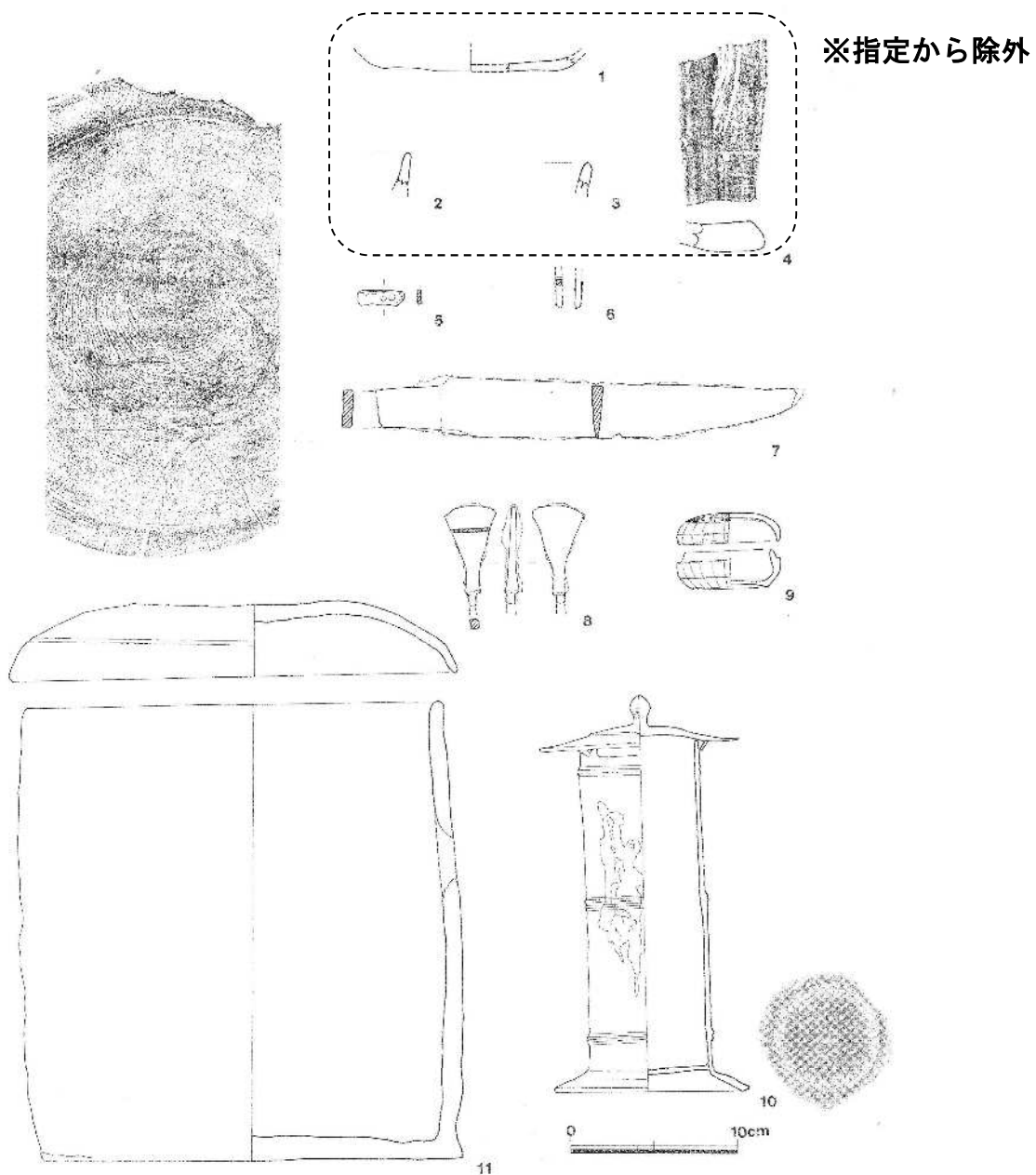


第4図
経塚1出土遺物実測図



第5図 経筒1写真

添付資料4 出土遺物



第6図 経塚2出土遺物実測図

添付資料5 出土遺物



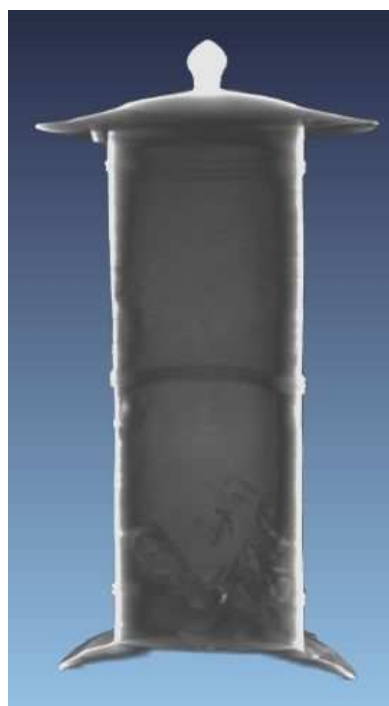
第7図 経筒2写真



第8図 経筒2外容器写真



第9図 経筒2三次元スキャン



第10図 経筒2三次元スキャン断面

添付資料6 市内出土経筒

北九州市出土の経筒について

番号	名称	出土地	所有者	時代	
	備考				
1	有毛太郎坊山遺跡(経筒1)	出土地	北九州市	青銅製	平安時代
	外側に鍍金の跡がのこる優品で、本来は全体に鍍金していたと考えられる。やや太型。				
2	有毛太郎坊山遺跡(経筒2)	若松区有毛	北九州市	青銅製	平安時代
	胴部は上・中・下の三段に突線紐帯が鑄出されている。「鎮国寺型」と呼ばれる形状で、底面に和鏡を用いる。				
3	ハリヤ経塚	小倉南区蒲生	東京国立博物館	青銅製	永久6年(1118)銘
	経筒内に紙本経8巻分納入。経筒銘文から、金山谷・前ペラ山経筒と同じ勸進や工人によって製作されたと考えられる。鎮国寺型。明治39年出土。				
4	金山谷・前ペラ山経塚	小倉南区守恒	東京国立博物館	青銅製	永久6年(1118)銘
	妙法蓮華経の紙本墨書経残片と外容器の陶製甕が伴う。鎮国寺型。明治42年出土と伝わる。				
5	金山経塚	小倉南区守恒	東京国立博物館	青銅製	12世紀か
	鎮国寺型。明治43年出土と伝わる。				
6	山本経塚	小倉南区山本	個人蔵	青銅製	11~12世紀
	鎮国寺型。出土年月日および出土遺構は不明。				
7	鴻ノ巣山経塚	小倉北区東宮ノ尾	個人蔵	青銅製	12世紀か
	紙本墨書経8巻が残る。鎮国寺型。昭和23年出土。				
8	吉祥寺裏山経塚【市指定】	八幡西区吉祥寺	吉祥寺	陶製	10~12世紀
	宋代浙江地方で生産された越州窯系の陶製経筒で、口縁部を打ち欠く。附の蓋は和鏡で、草花双鳥鏡の一種である。				
9	聖福寺経筒【市指定】	八幡西区上香月	聖福寺	銅製	正和5年(1316)銘
	2口。銅板巻き合せにて作成。本堂前の五重層塔2基より発見と伝わる。外面に針書きを持つ。				



③ハリヤ経塚
(東京国立博物館蔵)

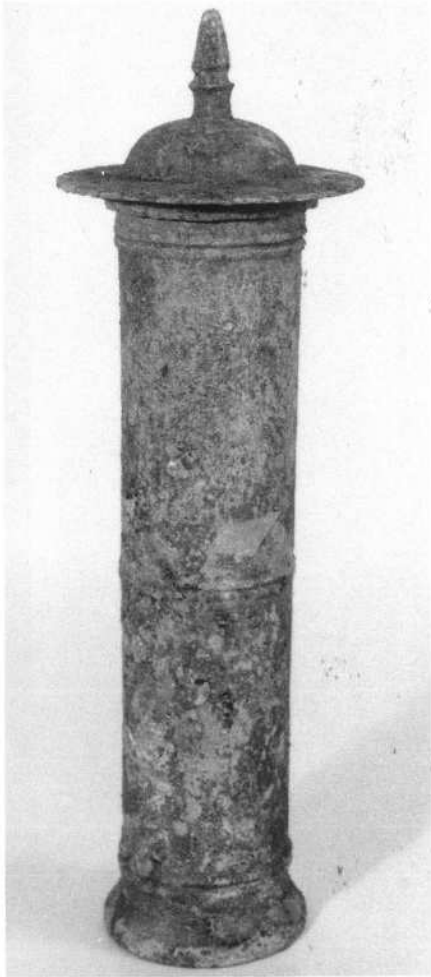


④金山谷・前ペラ山経塚
(東京国立博物館蔵)



⑤金山経塚
(東京国立博物館蔵)

添付資料7 市内出土経筒



⑥山本経塚（個人蔵）



⑦鴻ノ巣山経塚（個人蔵）



⑧吉祥寺裏山経塚【市指定】



⑨聖福寺経筒【市指定】

有毛太郎坊山遺跡経塚出土品

(1) 経塚1出土遺物(集石1より出土)

器種	番号	計測値(cm)			遺存率(%)	品質形状等	出土地点	報告書挿図番号	通番
		口径(最大長)	底径(最大幅)	器高(最大厚)					
青銅製経筒	1—1	14.4(蓋)	(13.3)	—	20	青銅製経筒。2枚の銅板を半筒形に丸めて鉄留めした大型のもので、腐食、破損しており、蓋と一部の胴部と底部が残る。外面に渡金の痕跡が残ることから、本来は全体に渡金されていたものと考えられる。円形の底部は一部が残存する。蓋は被蓋形式で、銅板を叩き延ばして整形したもので、端部を折り曲げ1cmほどの扁平な縁を作り出し、端部下に身と重ね合わせるための8mmの下がり部を作る。擬宝珠鈕には四葉座が伴う。蓋・胴部と底部、底板にわかる。	集石1(経塚1)	第28図-1 第29図	1
湖州六花鏡	1—2	[10.14]	(6.2)	3.0	50	湖州六花鏡。銘文は明確には読み取れないが、一部に2×3cmの長方形の囲みがある。破損端部付近が3cm程くぼむ。鈕は1.0×0.4cmの長方形	集石1(経塚1)	第28図-3 第30図	2
棒状鍛造鉄器	1—3	(6.0)	—	—	—	棒状鍛造鉄器。断面長方形を呈する。鉄鏃の茎か。2片接合。	集石1(経塚1)	第28図-5 第30図	3
青磁小形壺	1—4	2.6	2.8	(4.0)	90	青磁小形壺。口縁部と肩部が一部欠。外面黄灰色釉。底部外面露体、一部に砂付着。6片接合。	集石1(経塚1)	第28図-4 第32図	4
台座石	1—5	23.5	20.0	3.2	80	砂岩製の平石。経塚1出土経筒の台座石として使用。台座として使用された面の剥離が激しい。14片接合。	集石1(経塚1)		5

(2) 経塚2出土遺物(集石3より出土)

器種	番号	計測値(cm)			遺存率(%)	品質形状等	出土地点	報告書挿図番号	通番
		口径(最大長)	底径(最大幅)	器高(最大厚)					
青銅製経筒	2—1	7.2(筒) 12(蓋)	11.7	23.7	98	青銅製経筒。胴部は竹を模し、7.3cm間隔で上・中・下の三段に突線紐帯が鑄出されている。上下段は突線紐帯が2条、中段は3条である。胴部外面には数箇所不規則な傷がみられ、CTスキャンにより鑄掛による修復痕が確認できる。笠蓋は被蓋形式。やや扁平な形状をしており、緩い甲盛をもつ。底板は秋草が鑄込まれた中央に鈕のある和鏡で、はめ底。内部には塊状に団結した紙片が多数残る。鎮国寺型。	集石3(経塚2)	第41図-10 第42図-10	6

経筒外容器	2—2	26.2	25.0	27.4	100	経筒専用外容器。円筒で、身の浅い皿状の蓋と対をなす。蓋上面には糸切りの痕跡が残る。身、蓋ともにしっかりした作りで、胎土は砂粒が少なく精良。焼成良好。身の側面には焼成後に外面からの穿孔あり。孔はやや不定形で径3cm程を計る。	集石3 (経塚2)	第41図-11 第42図-11	7
紙本経片	2—3	—	—	—	—	経塚2出土経筒内に残る紙片。塊状に団結しており判読不能。紙本経の経巻か。	集石3 (経塚2)	第41図-7 第42図-7	8
鉄小刀	2—4	(25.1) (刃部 22.0)	3.1	0.6	90	鉄小刀。切先部一部欠損。一部に鞆の木質が残る。関部は棟部分に明確な段を有す。2片接合。	集石3 (経塚2)	第41図-7 第42図-7	9
青銅製刀装具	2—5	(2.9)	0.8	0.3	—	青銅製刀装具。鉄小刀に付属する鍔(はばき)か。片面に銚留め状の装飾痕が残る。	集石3 (経塚2)	第41図-5 第42図-5	10
鉄鏃	2—6	(6.0)	3.2	—	70	鉄鏃。茎部根元より欠損。平根式。	集石3 (経塚2)	第41図-8 第42図-8	11
青白磁合子	2—7	(6.2)	(4.5)	3.6	30	青白磁合子。平型の印籠型。釉色は青白色で、蓋上面に銭繫ぎ文を型押しする例は稀少である。保存状況もよく優品。景德鎮窯。蓋1片を復元、身3片接合後復元。	集石3 (経塚2)	第41図-9 第42図-9	12
ガラス小玉	2—8	—	0.6	0.2~0.3	—	出土数は約40点(報告34点)。非常に保存状態がわるく、1点をのぞき灰白色に変色している。	集石3 (経塚2)	第43図 第44図	13